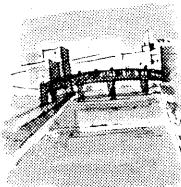


日本語の話

内

藤

濯



らりと読む必要があるということをしみじみ感じ、帰国してから盛んにやりました。

フランス文学を研究し、だんだん独自のフランス語をやつていてるうちに、私は自分が日本人であるということに気がつきました。日本人だから、どんなにフランス人の真似をしたところで、とてもフランス人のようになれるはずはありません。

フランスには、コメディーフランセーズで、土曜日に専属の俳優連が入れかわりたちかわりあらわれて、自分の好きな詩を朗読するというのがあります。私もフランスにいた頃はいつも行きましたが、大いに得るところがありました。会場は満員です。そこには生きたフランス語があり、なるほどフランス語というのはこういうもののかと感銘を受けました。これが病みついで、日本でも詩をよむ、さ

「星の王子と私」という本を出したとき、私はそれについて何か話をしてくれというN H Kからの依頼を受けました。放送するにあたって、まずジエラール・フィリップという人の大変美しいテープがありますから、それをかけてから先生のお話にうつりたいと担当の人が言いましたから私は一言申しました。

ただ美しいとだけ言うのでは、聴いている人はなぜ美しいのかがわかりません。それではまるで子どもみたいな言葉です。ただ美しいと言うだけではなく、なぜ美しいの

かを言わなければ、人は承知しないでしよう。

これは自分の実験から言うのですが、英語やドイツ語などヨーロッパの方のことばは、とくに子音が多い。そのためしまりがありすぎ、ことばがかたくなります。反対に南の国、スペインとかイタリーとかのことばは、母音が多すぎるためしまりがなくなります。さあ、その中間に位置するフランス語というのは、子音と母音のあやどりがまことに良く出来ているということが言えます。これを言わないと、なぜフランス語をやるかという、目的がありません。それに加えてもうひとつ日本語にはないような母音：鼻母音があります。鼻にかけた母音というのはとてもきれいなもので、これが一層フランス語を美しくしているのです。これらを言わなければ、美しいということは意味をなさないでしょう。外国語はただやるのはありません。日本語をよくするという意味で外国語をやる。私はもうそういうときに来ていると思うのです。

私が学生のときに講義をうけた上田敏先生は、たいそう耳のいい人でした。秋の日のヴィオロンのためいきの…、これは、オー、オー、オーという感じです。我々はふくろ

うの鳴き声をきくとさびしくなりますが、この詩はその効果を出しているのだから、それを生かさなくてはいけない

と先生は言われました。ほんとうにその通りですね。

海潮音に「両替橋」という詩が載っていますが、これを訳されるとき先生は原語をそのまま使われました。両替橋

というと、子音が多すぎてきたない。だから最初からポン…トオ・シアンジュ、花市の晩。風のまにまにふわふわと……どころでてくる。私はボーッとしてしまいました。なかなか良い感覚です。原書を読むときに、ことばを追つて読むようなことでは困りますが、先生のはそうではなくたから、私はおもしろくてたまりませんでした。

私は、文学をやらない人がもっていなければならぬ文學が、どうしてもなくてはいけないということに気がつきました。暮らしの中にある文学、万人がもたなければならぬ文学、これは文学というより文學以前です。このごろ私は、文学をやる人間と話をしてもあまり発展がなく、かえって関係のないような人と話すときに思ひぬ発見をすることがあります。

先日も、日本橋高島屋近くにあるおすし屋の主人と対話

A decorative horizontal border at the top of the page, featuring a repeating pattern of small, five-pointed stars.

をしたときに、すしをつむということばがでてきた。つまむというのではいけない、おすしをひとつつみましょうと言ふのだそうです。まるで花をつむみたいで、大変いであります。すしのうまい勘所をぐっとおさえていませんね。これこそ文学者ならざる文学者ということに気がつきました。文学者以上です。文学概論などといふこととでてしまおうとする文学者は、私は文学者ではないと思ひます。

先にあり、それから書くことばがでてくるのですが、双方は区別されなければいけません。口語文を口から発していたのでは、心に直接感じるものがない。それは死んだことばです。どこか構えがちがうような気がするのです。新聞の記事は口語文ですが、その中から一つ例を出してみましょう。

『何より政治家が 血の通う政治を心かけさせすれば
つまつたパイプの通りをよくすることは、さしてむず
かしくないのではなかろうか』

『何より政治家が 血の通う政治を心かけさせすれば
つまつたパイプの通りをよくすることは、さしてむず
かしくないのではなかろうか』

夏目漱石の三四郎の中に、「我を忘れそのものにとらわれてしまつて、情熱を感じるような人間でなければ相手にするに足りない」というところがありますが、全くうまいことを言っています。理屈など一切言わない。酔つたような気持になることが、文学を味わうという態度です。そうではないと文学は生きてきません。勘所をおさえるということは立派な文学です。

ことばの息づかい……これは大切なものです。短い文章の人、長い文章の人、いろいろですけれども、余り長くなると人はわかりません。先程の文章を口語にするに、次のよ

と人はわかりません。先程の文章を口語にtranslateするにすれば何でもないのでありますか。

ことばの言い方ひとつで、生活をもつと豊かにすることができます。日本人は一般にもの言い方を知りません。今日本人全体が困ったものだというのは、口語と日本語文が入り乱れていることです。ことばは、話すことばが

通りをよくすることなんか』

けてくるだろうと思います。

星の王子さまの作者サンテグジュベリは、六つの性格をもつてゐると思います。男らしくて、けなげで、おくびょうでうんと考え方でいるかと思うとにこにこするというように。その六つの性格の更に深いところにもうひとつ大きなものがあるので、それをどう言いあらわそうかと考えたあげく、芯があるということばを見つけました。この芯というのは、日本製の漢語だそうです。日本製の漢語というのはみんなないです。

日本人には万葉の昔からすぐれた感覚があります。象徴詩は、フランスの専売のようにいつていますけれども、あにはからんや、万葉の歌人がちゃんと象徴していますし、また色彩聴覚についても同様です。このようなすぐれた素質が日本人にはあるのに、日本語が乱れてくるというのはことばかけが悪いからです。これでは皆がよほど苦労しないと、日本語というのはめちゃめちゃになってしまふ。教科書にいろいろな文章があります。これはみんな口語文ですから、あれを口語に直す練習をするのも一つの方法でしょう。そうしたら私は、そこから日本語をよくする道が開

標準語というのを皆さんはどうお考えになりますか。アナウンサーのしゃべることばを標準語だと言ふ人もありますけれど、私はあれを聞くとギョッとします。どのアナウンサーがしゃべっても同じことで大変良く似ています。しかしあれでは、ちっともしゃべっている人自身が生きてきません。標準語というのはそれではいけません。

長谷川如是閑さんが何かの座談会のときに、標準語というは何だかわからない、それより皆のお手本となることばといった方がいいですねといわれたことがあります。私はこれに大いに同感しました。皆のお手本となることば、……いいですね。そして考えてみると、今の日本にはありませんね。これは、よってたかって皆がこれから作ることばです。それでこそ皆のお手本となるのであって、いつで生きるかわかりません。わかりませんが、あまりあせらずにお手本を作るような気分をつくることです。気分ができたら、自然にそういうふうになつてくるのではないでしようか。日本ではまだまだそこまで到達してはいません。それから、女の人の「あのね」、「ええと、何でしたかね」と

いうようなことば……合の手といつたらいいんでしょうか……は会話の中にはいった方がいいですね。我々は、仲の良い相手だとますます合の手を使いますが、これを使うとことばが生きてきます。

きのこと。外出から帰ってくると、電燈をつけっぱなしにしていたことに気がつきました。そこへおかみさんがやつて来て、さしづめ日本のおかみさんだったら、「何です、明りをつけっぱなしにして」とでもどなるところを、フランスのおかみさん、「明りがひとりじゃさびしから」ずい

「あなたはほんとに白い肌をしていらっしゃいますね」と言われたとき、日本だと、「あらいやだ」か、「そんな

ことありませんよ』かのどちらかですね。てれかくしをしてしまうのです。そんなことありませんよと言うときの心理状態は嬉しいのですが、何というのか、日本人はてれかくしがうまい。ところが、フランスではそうは言いません。相手がほめてくれたのだから、あたりまえだという気持です。「ええ」と返事する。そして、「でもね、汚れっぽいんですよ」と言う。これがフランスでいうエスプリです。

日本人はこれを心得て いないのです。これがまだまだ足りません。積極的にやるようにしてごらんなさい。生活が非常にもしろくなつてくるのではありませんか。

フランスのことがでたついでに、またこんなこともあります。岡鹿之助という画家がフランスで下宿をしていたと

私は大変驚き、また非常に感心したものですから、下宿に帰つて辰野豊さんにその話をしますと、彼も同じことを聞いたと言ひます。つまり、ひとりだけが言つているのではなく、それが日常語となつて、人々にしみついているのです。

も楽しくなるでしょう。

フランスでは、このようなことばをフランス語にするのに誰が気をつけたかと言いますと、それは女人の人です。女人人が先に立って、男の人のことばを直すような方向にもつていったのです。まずははじめは、家庭の中でのものの言い方から。そしてそういうことから家庭がよくなり、社会全体がよくなっていくのでしょうか。私たちも、ひとつぶうしていこうではありませんか。

ところで、声のことばについてお話しをおきましょう。

のことについて発声。発声は音楽と同じことです。歌を歌うときには、伴奏があるとともに歌いやくなりますが、話すときもこれと同じであることを、私は経験から知りました。話すときに伴奏があると、とても話がうまくいくということを発見したのです。

話がうまくいくための伴奏ですから、楽器のみならず、自然な樂器である喉も、また伴奏になるということを私は実行しています。

大学でゼミをやっているとき、疲れてくると誰かに歌を歌つてもらうのです。そうすると、話をするのに非常に気

持がよくなる。

これから通じて、しゃべることばもやはりひとつの音楽であるという感覚がでてきます。音楽と同じように、高さ、速度、強さがあり、これが決まるときとは適当に間をつくる。そしてことばとなるのです。間というのは大切です。間のないはずらした話は、ちっともおもしろくありません。こういうことから考えると、ものをいうことは音楽になる。最も自然な音楽ではないでしょうか。そ

ういう意味で、発声の訓練をする必要があると思うのです。

万葉の歌人は、まず声でうたうことからはじめました。

万葉のことばというのはあとではありませんか。声のことばを大事にしなければ、何事も成り立たないということを忘れてはなりません。また勘所をおさえていることも大切です。生きた文学をやる人間は、これから素人といっしょにならなければいけません。街の一隅にも、文學者はいません。だから油断はできません。

(文責編集部)